ハレバレモンスターSTORY

第１章

第８話　夏の終わりの始まり

ハレバレタウンの夏祭りを前日に控えた8月30日。
『やっば！もうこんな時間』
「ほんと、そろそろ片付けないと」
「いっつも最後は何だかんだ日が暮れるまで話してるよね～」
「って言ってももう明日が夏祭り当日だからな」
「あとは楽しむだけさ」
「・・・明日か」

あっという間だった１ヶ月を振り返る。
本当に明日、みんなで作った花火が打ち上がるのか？そんな不安も過(よ)ぎりながらも、圧倒的に実感がない。

『あっしまったー』
「どしたの？」
「なんかやり忘れてた？」
『ううん、なんでもない』
「ホントに～？気になるんだけど」
『今日の帰りにko-ko屋、寄ろうと思ってたの』
「前日記念？」
『それもあるけど、ニックんが参加してからまだみんなで食べてないから』
「確かに！」
「えっ？なんでみんなで食べるの？」
『私は大切な人とコロッケを食べるって決めてるの』
「なんだよそれ」

「走れば間に合うんじゃない？」
『コロッケは逃げないから大丈夫！明日は夏祭りで大変だし、1日の学校帰りに打ち上げも兼ねて行くからね。みんな絶対参加だからね』

8月31日【夏祭り当日】

『私たちの打ち上げ時間は後半くらいだって』
「じゃあそれまではみんなで回る？」
「そうしよ、そうしよ～アタシ綿飴食べたい」
「太るぞ」
「っ！！・・テツ、まじ許さないから」
「いってぇ！！」

ハルネの平手打ちがテツの腕を打ちつける、その音を合図にしたかのように僕たちの夏祭りが始まった。
一通り露店も見終わり、空が少しずつ赤く染まっていく。
花火大会が、僕たちの夏の終わりが、もう間も無く始まろうとしていた時だった。

「ねぇ？あれなんだろ？」

ハルネが見つけた大きな木箱の側面には”20時③”と紙が貼られている。
そっと開けてみるとそこには僕たちの花火があった。

「これ？私たちのだよね？他の人たちのもいっぱい・・・」
「どういうこと？」
考えられる可能性は一つ。搬入漏れだ。
「夜中に降った雨で打ち上げ会場が対岸に変更になったって放送が、回ってる時に言ってたから、移動の時に入れ忘れたんだ。」
「どうしよう、このままじゃ私たちのも他の人のも打ち上がらないよ」

一瞬の静寂の後、彼女が口を開いた。
『持っていこう』